

A-33 老年期の食生活に関する研究(第4報)

その1 在宅老人と集団生活の老人(ホーム)

東筑紫短大 綱身節子 磯 存子 神原信子

目的 第3報までは老年期の食生活を在宅老人生活者を対象として、地域別に視点をあて、摂取食品 pattern と要因の関係について分析し発表した。老年人口の増加が注目されている現在、核家族化、住宅事情などで家庭内で生活できない老人が、老人福祉施設の利用とする傾向が高まっている(540~50年の10年間で27%増:厚生指標51年)社会福祉施設の伸びの中でも老人福祉施設は核家族の進行や老年人口の趨勢的増加にともなう。今後ますます増加することが予想され、55年10月1日現在で2,155ヶ所と増えていると報告されている。今回は増加の傾向にある集団生活者と在宅老人を対比して老年期の食生活に視点をあてた。

方法 北九州地区在宅老人(男40, 女62), 集団生活者老人:養護老人ホーム(男19, 女43)を対象として、摂取食品 pattern を調査し、要因別(性別、家族構成別、健康別)に分析を行った。分析方法は3報に準じて行った。

結果 在宅老人と集団生活者老人の家族構成別では、在宅老人は、老人と成人と子供の構成(55%)で生活しており、集団生活者老人では、老人のみの生活(55%)が多く明らかな相違点であった。健康度からみると在宅では過去より現在まで健康である人が男女ともに(75~85%)多く、集団生活者老人では男(24%), 女(48%)と低く相違点があった。摂取食品 pattern では、嗜好の面で自由選択のできる在宅老人に対し、集団食として与えられる集団生活者老人では摂取量に相違がみられた。